慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	言語のフォークロア：「奴詞」を中心にして
Sub Title	Elements folkloriques dans la langue japonaise, autour des "Yakko kotoba"
Author	池田, 彌三郎(Ikeda, Yasaburo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.248- 264
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0248

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

言語のフォークロア

——「奴詞」を中心にして——

池田彌三郎

一

世の中が大きく交替していく時には、特殊な階級が際立って目につくことがある。われわれがそれを目前にみたのは、太平洋戦争の終結後の数年間、荒廃した都会の駅前広場に集まり散じた人々がそれであった。いわゆる戦後の、虚脱した、価値の転倒した時代、というよりも、価値観の失なわれてしまった時代で、変ったものがいいとされた時代であった。前髪をたて、原色のアロハのシャツを身に着け、色眼鏡をかけ、細身の下駄に赤い鼻緒をすげて履いていた。そうした、刺激的で、ざっくばらんな身のとりなりや服装が、よしとされたのである。「特攻くずれ」などと呼ばれた復員軍人、工場その他に動員されて少年時代を学園外で過し、遂に学園生活の中に完全に復帰しそびれてしまった学生生徒くずれ、さらには闇屋と呼ばれた物資運搬の経済事犯の群れ、等々、必ずしも心底からの犯罪者、法外者ではないが、それとすれすれの処にいて、世俗の旧道徳に反撥していた連衆である。

しかし、これらの人々は、特殊な一つの階級を際立たせる以前に、案外に早く、他の階級に吸収されていってしまった。そのまま、

法外者の群れに転落していったか、どうにか普通人の生活の中に立ち戻ったかして、一つの階級としてのフォークロアを形成するだけの時間を、集団としての感情、生活の気分を持ち続けないでしまった。それぞれの出身の階級との完全な絶縁に到らぬ中に、特殊な階級方言さえ樹立せずに、消滅してしまったのである。その階級の残滓といったものは、いわゆる法外者の隠語の中に、若干の語を留めているにすぎない。

ところが、日本では過去の時代に、くっきりとした一つの、それに似た階級が存在していた。それはいわゆる「奴」と言われた階級である。

近世の奴は、やつこであって、これは、やつこと呼ばれた、賤民・奴隷の階級に属する古代のものとは、直接の連絡はない。奴と呼ばれる階級に所属する人々が、そういう名で呼ばれるようになったのには、古代のやつことは連絡のない、別の手順の経過が辿られると思う。

おそらく、武家階級の中の低い階層の者達の結ったある髪形が印象的で、その形に結った髪をやっこと言ったのが、近世の奴という語の出発点であろう。馬の口取りとか、馬廻りの者の、派手な恰好を好んだ者達が、そういう髪に結い上げ、その髪の形によって、ある位置にいる者であることが見た目にわかるようになり、階級形成の素地が作られていたのであろう。そしてその風采の、派手で伊達な風が、モダーンでエロチックな刺激に富んでいたところから、そういう髪の形に結う者が増え、ますます世間にその人々が目につくようになり、やがてそれらの人々が、やっこと呼びなされるに到ったのであろう。

だから、やっこと言われる階級に所属した者は、髪の形を始めとして、いわゆる「かぶき風」と言われる外見上の特徴を示した。寛闊・六方・丹前などと言われるのには多少中心に少しずつのずれがあるようだが、それらをかぶき風と言う時には、やつこの、具体的な特徴を言い表わしている。そして、そういう外見上の特徴をもった階級の人々の、生活の気分や雰囲気を加えて「かぶき風」を抽象的に言った時には「やつこ風」という語が用いられた。

近世の「奴」という階級は、元和偃武の後、さらに百年を経て、前代の遺風として伝わっていたこの「やつこ風」「かぶき風」を、

放蕩無頼・ごろつきの徒が模倣して、自然に形成されて行った階級である。政治力によって整理されきらずに残っていた、乱世の遺風を、平安な社会におけるアウト・ロウが継承して、世間をのし歩いたのである。

そうした奴には、さまざまな階級の出身者があった。町人階級からはみ出してこの階級に投じたものが町奴であり、武家の階級からのあぶれ者は、江戸では将軍のお膝元の、旗本衆の奴だったのが旗本奴と呼ばれた。京には京で公家奴があった。それらは、仔細に見ればさまざまな段階があったが、要するに、フォークロリックな生活様式を一つにしていたから、ことばは共通していた。これが「奴詞」と言われるものである。

奴詞は、およそ元禄を中心として流行したことばであるが、その後にも、この系統のことばが残っており、それが種々なる階級にしみこんでいっている。ことに奴詞は、江戸の町を本場として栄えたために、自然に、標準語に併行していることばというような、取り扱いを受けて来た。初めは、誰もが、このことばの品位というものについて、判断はしていたはずである。そのことばがごろつきのことばであり、あるいは無頼漢の郷土のことばであるとして、軽蔑されていたに違いない。それが時の経過につれて、その中のあるものは低級なものとして固定したが、一方では、その一部は次第に標準語の中に割りこんで行き、いつか、そうした出身の語であることが忘れられて行った。つまり、健全な社会の人々のことばに昇格していったのである。今日われわれが、ごく普通のことばとして、ほとんど何の反省もなしに、抵抗も感じなくなっていることばの中に、徳川の初期においては軽蔑され、眉をひそめられた奴詞が、案外にまじっているのである。

それらのことばが標準語化していく道程には、演劇や文学があったであろうことは想像にかたくない。もし、仔細にその跡を辿るとしたら、歌舞伎の舞台における初期の台詞などの中に、多くの奴詞が見出せるであろう。

二

奴詞の考察といっても、相当広範囲にわたることになるが、ここでは、その奴詞が、ふんだんに、集中的に使われている「奴俳諧」

を取り上げてみる。

ここに「奴俳諧」というのは、寛文七年正月の刊記のある本で、萩原蘿月氏が「貝おほひ」と併せて活字本にして刊行された、旧帝大国文学研究室蔵本である。

題僉に、ゑいり、清十郎ついぜん、やつこはいかい、とあるもので、可徳の独吟百韻一巻に、定興という人の判が加えてあるものである。可徳の伝はわからないが、寛文七年と言えば、貞門の俳諧の全盛期で、宗因が「さればここに談林の木あり」と発句をものして、貞門門流の眠りをさました延宝元年より、六年前のことである。貞門の俳諧は、「俳言」ということを喧しく言い、後に宗因一派の俳諧を罵倒しに難書には、談林の句を「無俳言」として斥けている判が頻りにみられる。そういう態度による句作だから、奴俳諧だから、それを奴俳諧たらしめるために、俳言の代りに奴詞が必ずいれてある。それが、奴詞蒐集のためには便利である。それだけに、百韻の各句に、ただ奴詞が入れてあるというだけで、内容がやつこ風だとして誇りうるものは案外少ない。

短夜に星のおやぢの月澄みて

などというのは、「星のおやぢ」が奴詞ということなのであろう。月をそう言ったというだけの語が、ただ挿入してあるにすぎないのだが、逆に、それだから、奴詞としての「星のおやじ」という語が拾い出せるのである。

ここかしこ地瘤の雪の消えやらず

なども、山のことを地瘤（地面のこぶ）と言っているだけで、一向に、一句はやつこ風でもなく、面白くもなんともない。何の伝えが最初か知らぬが、豊臣秀吉の句だという、

地瘤から星のおやぢがつんのぼり

などの方が、秀吉の頃にあったかどうかは別として、秀吉に仮託した処に、秀吉の性格や素性への認識を示していて、ずっと面白い。

「ここかしこ」の句に対する定興の判のことばの中には、

六方者の目には、提灯を「火事の卵」と見、月を「星のおやぢ」と見て、山を「地瘤」となん……

とあって、六方者（すなわち奴）のことばが蒐集できる。

以下、一句の中の語で、それを奴詞とみるよりほかはない、という語を拾ってみると、

佐保姫にいかなるやつかくどくらん

山山やめったやたらに霞むらん

生みおとす子のててのかはゆさ

ほほうでっかい園のやり梅

あちらこちらをするはどろぼう

あたふたとしも解きしふんどし

世をうっちゃりし袖の哀れさ

そ首をひねり小うたよむ秋

めったやたらは「めったやたらにし散らしはべる」などと判のことばにもある。それにあたふたなどは、今日ではもはや、何等、軽蔑すべき階級のことばなどではない。やつ・てて（父）・どろぼうなども奴詞だったことはむしろ意外だ。うっちゃり・そくびは、今も相撲の用語に残っているし、うっちゃり拾いと言えば紙屑買いのことである。

でっかいという語などは、今でもまだ俗語的語感があるが、例の「予科練の歌」で「でっかい希望の雲が湧く」と歌っているところをみると、すでに軽蔑すべき出身の語だということは忘れられていよう。歌舞伎芝居での化粧声（けしょうごえ）（たとえば車引でみられるように、役の敵味方などに関係なく、役者にかえって、大部屋連が座頭の身振りに讃美の声援を送るかけ声）は、「でっけぇ」とかける。奴詞がはいったというよりも、歌舞伎者がやっこであった歴史に関連していることである。筑波山地方の民謡に、

筑波山つくばってさえでっかいな。立ったら雲をつきぬくだんべい。

というのがある。似た形のものが、『嬉遊笑覧』に「古き歌に」として記してある。

つくば山つくばってさえでっかいに、つったったらなお、でっかかるべい。

関東べいと言われたべいと、併用しているところからみても、でっかいの故郷が知れるであろう。

いかにも奴詞らしい語には、語そのものがそうであるのと、他語を流用して、表現をオーバーにしているものとがある。

隆達といふづくにうがはやり出し

月見とて寄り集りてねぢりひげ

ふらふらと市のかりやをのめり出で

月くらき国にのめりをかへす袖

太鼓をしのとろに打ってうちぬめり

五位鷺は刈田にばたらとびおりて

おぞやかな八重九重の花のばん

ひっからと照る月を待つ折にふれ

思ひきれとすっぱらぬくはせん刀

ちょいちょいや花のようなる茶屋のかか

くわんわつとひらけやひらけ庭の花

こぼるるなだの雨とふる塚

のめりとかぬめりとかは、江戸の少し前ぐらいからはやり出している語で、のらくらして暮していること。いかにも無頼の感じがある。おぞやかなは判のことばに「おそろしやということか」とある。ちょいちょいは芝居で発する見物人のほめ詞（物を見、声を聞いて感じてほむるに昔はちょいちょいといへり（嬉遊笑覧））で、近代なら、チェストとでもいうのにあたるだろう。寛闊が、奴詞として存在していることもわかるし、なだは、なみだ、なんだがなだとなった語で、これなども奴詞としては古い。

名残り惜しいとほざくたはれ女

夜一夜ほえた松虫の声

松虫が鳴くのをほえるというのもオーバーなはなしだが、前にもあげたように、時鳥も「ちほゆる」と言われている。

この奴俳諧は、もちろんまだ無頼漢のことばが、標準語になる前の、階級的フォークロアとしての印象がはつきりしている時分に、その荒い、乱暴な感覚を利用して作っているわけで、やつこ風として成功しているものも散見する。

三味線のべんべれつくの音聞きて

ばちの音を、荒っぽくべんべれつくと言ったのだろうが、いかにも奴詞らしい。

草花やいけて血目玉なぐさまん

血という字があててあるが、漢字の意味には関係あるまい。ちという接頭語はほかにも多いが、いかにも荒っぽい連衆の気持ちがでている。次のは四句続いて、

うっぽりと様を待ちぬる夕暮れに

心はひょろらひょんとうかれ女

海草を拾ふ小舟にぶん乗りて

まかせておけと出づる伊勢うら

この続きは、判に、まかせておけと言ふ五もじ前へもたれ候、とあるが、しかしなかなか奴俳諧らしい付け合いである。

三

発句の、

若竹だ世にはやり歌や清十郎ぶし

の判のことばを例としてあげてみると、

鬼のち目玉にも涙とはよく言ったもさ。やっこの口で、やさしくも俳諧を、清十郎が年も若竹の世の歌の節に言ひかけ、彼が妻夫のなれのはてを、事あはれにもとぶらふ百韻の巻がしらを、がいにおもしろう、いけ肝にひっちみて、棒を二本ひんなぐり申した。

右の判のことばの中にある奴詞の中、もさについては後に述べる。

ち目玉は前に言ったが、ほかに、ち腰・ちほゆるなどがある。

君思う時は血腰もぬけ果てて

（判詞）時鳥ちほゆるかた……

がいにはむやみにということで、標準語にはならなかったが、今、広く方言に残っていて、がいに、がいなこと、などが採集されている。この奴俳諧には、がいなもある。

尊い神のがいな氏子等

ひっちみて・ひんなぐりというような、接頭語は実に多い。そして、二三を除いては、ほとんど促音と撥音とである。

いけ　右にいけ肝があったが、今もこれは東京語に多く残っている。いけしゃあしゃあ・いけ好かない・いけぞんざい・いけずうずうしい。

どう　どう腹・どうなか。

国名望む夏のどうなか。

夏のどうなかとは定めて夏の最中ということだんべいな。……

あとは、促音、撥音を利用したものが盛んに用いられている。

かつ　所の名どもかっつきて

かん　丸点をかんなぐる・千鳥かん鳴く
ぐん　若きときは飯鉢ともにぐん飲み申した
しゃっ　雨の祈りをしたるしゃっ面
つっ　秋の螢のゑらつっとべり・つっ立っ春の四方の装ひ・つっ栄ふ代
つん　露のつんもる草の戸・跡につん残れ
とっ　学文を身にとっちめてする比に・とっとと沖にのっちめた舟
のっ　右の例。
ひっ　ひっかきつづる・ひっちみて・ひっつみて・ひっ契る・ひっかけられ
ひん　ひんなすって・ひんなぐり
ぷっ　ぷっ切れる刀の鍛冶の参内に
ふん　ふんまき

右のふんはあるいはぷんかもしれぬが、ほかにぶんは四例あって、すべて、申し合せたように、長句の中に使われている。

傾城にぶん向ひ居てものがたり
塩汲みの桶にも月をぶんのぼせ
夜をこめてぶん出る旅の宿の内
海草を拾ふ小舟にぶん乗りて

接頭語の多種多様に比べて、接尾語の方はほとんどその特徴が見られない。それに対して、敍述語の形には、いろいろな用例がでて来る。その中、だ・です・ないなどについては別にまとめることにするが、まず目につくのは、ちゃである。

ひんなすっておくりゃれちゃ。

少しはほのじで点をかけたちゃ。
柳が蔭は日もさらぬっちゃ。
つけはなれない句のしただちゃ。

もう一つ、例の多いのは、

春風もまだ寒っこき里
男伊達のぬるっこく似合い申さねども。
あつもりの心の内のむしっこさ
飲むにすっこきこのにごり酒
ひやっこき水にて耳や洗ふらん

と言う言い方である。ひやっこいなどは、今でも東京語では用いられている。

さらに命令の語尾ろが、歴然たる奴詞であることがわかる。

六条の宿の戸あけろここあけろ
とくと吟味なさろ

以上のほかに、奴詞には、以外に田舎詞が多い。それはおそらく、奴と言われた階級の者が郷土から持ちこんだものであろう。

端居にねまり飲むは大酒

長唄「越後獅子」で、ねまりねまらず待ちあかす、と歌われ、有名なことばであり、芭蕉の俳句にも、

涼しさをわが宿にしてねまるなり

とある。今も方言では有力だが、奴詞だったことは、この例でたしかであろう。本来、田舎詞だったのである。

あんちゅうことか。暦のように書きなされたもさ。

あんとしても物がひっかけられ申すまい。

あんでもたもらないで少しはおごりだ。

春雨と、あぜほざかない。

さらにべい到っては、はなはだ多い。

豆腐売るべい見せを出す袖

参宮をいざすべいとやいさむらん

あとは判のことばに、よかんべい・あるべい・あんべい・だんべい・ござんべいなどがある。べいは一時はこのように奴詞として栄えたが、今は方言に定着している。江戸周辺の田舎詞で、そのあたりの出身の下僕のことばだったようだ。

四

前にあげた判のことば、あるいは別の語の用例としてあげたもののなかに散見しているもさについて述べておく。世間で「もさ詞」と言われたほど、耳についた語だが、これでみると、はっきりと、奴詞であることがわかる。

ちょいちょいや花のようなる茶屋のかか

霞む祇園の恋しいぞもさ

このもさの使い方が本格の使い方なのだが、当時のことばとしては、間違うはずはないのだが、文章がかって来ると、文語文意識に影響されて、形が変って来てしまう。

六条の宿の戸あけろここあけろ

河原の院をわずか見もうさ

これなど、見るもさというのが本格なのだが、おそらく文学語の感じがはいって、こんな風に変化して来てしまうのだ。定興の書い

た判のことばにも、多くでて来るが、次の例などは、散文の例だが、使い方はよくわかると思う。

あんちゅうことか、暦のように書きなされたもさ。

みよしのの地瘤霞みて今朝は見たもさ。

なおさら返しの歌は、柴垣の結ひ足らないことだもさ。

源の代はつっ栄ふ花の春としたいもさ。

このもさについては、『歌舞伎年代記』に、中村傳九郎の朝日奈について述べたところに、傳九郎が朝日奈を演ずるについて、いろいろと工夫をしていた。ことにその台詞について、朝日奈に特色のあることばを使わせようと考えていた。上方のことばでは似合わないだろうから「関東べい」の中に、おかしい言いようがあるだろうと注意していた。ところが、田舎の山出しの乳母を置いていたが、その乳母がまだなれぬために、田舎詞まるだしで、ちょっと言うのにも、

それてっぽうが、ああべいとぎゃあるによって、早くのたくり、つんでるこんだあ。性はりな子だあもさあ。言うことをお聞きゃりもうさねえと、ちいちいにかませるよ

などと言うのを聞いて、これこそ朝日奈のことばにはもって来いだと言うわけで、この田舎詞をとりいれて、これをまねて、荒ごとをした、というのである。この記事は年代記の元禄元年のところに書いてあるので、奴俳諧の寛文七年より、二十年経っていることになり、およその年代はわかる。

中村傳九郎という人は、江戸役者の開山と言われた人だが、大体これで、もさの出所も想像できる。つまり、歌舞伎の世界の起原説明などは、真実性が稀薄だが、この話の通りではなくても、この話から考えられることは、もさが奴詞であるということのほかに、奴と言われた当時の寛闊な、近代的なモダーンな連衆のことばの出所、あるいは彼等自身の郷土までも思わせる、ということである。そう考えさせる点で、右の年代記の記事は大事である。

『燕石雑誌』の著者も、もさをとりあげている。鹿島おどりのはやしに、もさがあったというのだが、すでにこれには、合理的な解

釈が加えられている。すなわち、鹿島おどりというものに、おやもさおやもさとはやす、そのもさは「猛者」だろう、というのだ。

昔、人の心、猛きを旨としたる時に、作り出せしひなぶりならん。

と説き、猛者という漢音から出たことばだと言っている。さらに加えて、歌舞伎の役者が朝日奈をやる時に、その名のりに、

和田が三男、小林の朝日奈だもさ。

と言うのも、猛者のことで、朝日奈というたけき者だという、自負のことばだと説いている。歌舞伎では、朝日奈は、和田と巴御前とのに間できた勇者ということになっていて、猛者には違いないが、そのもさ猛者説は、もちろんとるにたりない。あるいは前にひいた奴俳諧の「見もうさ」というような発音があったために、余計、猛者説を、うなずき易いものにしたのかも知れぬ。『嬉遊笑覧』の引用によると、『壒嚢抄』の中に「坂東まうさ」とあるという。従って、もうさという風な発音があったらしいことは、奴俳諧以外の資料にもあるわけだ。坂東まうさとある以上は、関東ことば特有の表情だという風に考えられていたことがわかる。

もさはもちろん猛者ではなく、ことばの終りにつく、丁寧な呼びかけであろう。そのもさが、もしの一類と関係があるかどうかは別としても、紀州ののし、仙台のなし、尾張のなもしから出たなも、それらには皆同じ様な感覚がある様である。のんし、それから特になんしになると、なさい、くだされといった、丁寧な命令になるが、なおこれも、なもしで解けぬことはないと思う。

さすがに『嬉遊笑覧』は、もさをはっきりともしの意味に捕えていて、

もさは昔の坂東ことばなり。……これを猛者の音なりと言へるは、非なるべし。今も詞の終りに、もしといふことを添へていふ処あり。もさもこれと同じ。

と言っている。しかし、右に続いて「申すと言ふのやうにも聞ゆれど、なほさにはあらじ」と推定しているのだが、もさがもうす（申す）だとすると説は、あながちに否定は出来ない。敬語に類似している丁寧法の、いたします、します、などと似たもうすが、語尾が曲ったものなのかも知れないのであって、『笑覧』のように、「さにはあらじ」とまでは言えないように思う。現に奴俳諧でも、みもうさに「見申さ」という字をあてたりしていて、そこに、もさ申し説の意識があったことを示している。

また、ござらぬ、いたしません、と言う場合に、それをもさないと言った例もある。たとえば、「女殺油地獄」で、河内屋与兵衛と會津者の蠟九とが喧嘩をするところで、蠟九が女を恨んで言うことばを、近松はこう書いている。

大事の金銀を、湯水のように川遊び、ちょがらかされにゃ、来申さない。その男が聞く前で、昨夕のごとく言わないけりゃ、どやどや通りの無耶無耶の関、二度と越し申さない。

こういう例でみると、語尾に使われているもさとは性質が変って来ていて、あるいは近松の、上方の人であるところから来た誤解かも知れない。近松は、人物の出身を際立たせるために、それをことばで示そうとして、意識して造語しているらしいことも指摘されている（真下三郎氏『遊里語の研究』二二頁。一九五頁）くらいだから、浄瑠璃の人物のことばが、直ちに当時の言語資料となるかどうかは、用心してかかるべきであろう。

ところでこの河与は蠟九のことを、「やいもさめ」と言っているのだが、それは、もさことばを使う奴、ということで、もさが猛者でないことは、これでもはっきりしている。近世以来、今日でも、関西では、田舎出のぼうっとした者をだまして引っぱり廻す者のことを、もさひきと言っているが、そのもさも同じである。前田勇氏の『近世上方語辞典』によると、寛保二年（一七四二）の「軽口耳過室」に「百姓引（もさひき）」とあることがあげてあるが、江戸では、それから六十年程経って開板になった滑稽本の『舊観帖』（文化二年の序。一八〇五）に、「あんない者のことを一名もさ引という」とある。しかし、江戸の方ではそれが東京語の中には残っていかなかったようである。

もっさりなどという大阪の語は、なんとなくむさ苦しく、野暮たらしく、おもくるしいことをいうのだが、もさにはそういう語感があるので、語原説もその方に傾き勝ちだが、とにかく、敍述語につく為に、目につき、耳につき易いことばであったのだ。

（昭和になってから、古川ロッパ氏によって歌われた「うちのパパ」という歌に、「うちのパパ、もさり服、うちのママ、流行の服」という一節があった。もっさりの系統の語であろう。学生語に、盗むことを「もさる」というが、これはすり、萬引、強盗を意味するもさという隠語のラ行四段活用であって、このもさは、奴詞として今述べて来たもさとは関係があるまい。）

五

もさのほかに、奴俳諧で気のつく奴詞の中で、ことに多いのは、打消しの助動詞のないである。

このないは、今は、行かない、思わないなどと普通に使って、余程ことばに対して鋭い感覚を持っている人のほかは、あたり前の標準語だという風に受けとっているだろうが、このないも奴詞であって、おそらく當時は、ぬ（打消の助動詞）と取り替えることは出来ぬ程の、げすのことばと考えられていたことがわかる。今、東京では、主としてないを使うのに対して、関西では今でも、ぬをんと発音して、打消に使っているのは、上方語に対して、東京語が、その本格において、一籌を輸するものと言わなければならない。

是もふりでた春の長雨

春雨と、あぜほざかない。

この「是も」の句はよくわからないが、長い槍を振ることの連想があるのだろうか。その長い槍を振るではないが、降り出した春の長雨ということだろうか。それに対して、「なんで、春雨とぬかさぬのか」と、乱暴に言っているのだろう。

それすいた吹く尺八ややめぬらん

句作りのいきがたり申さない。作りようがあんべい。

あんべいと一緒に使っているところからみても、ないが低級な感覚の語だったことは想像がつく。そのほか、

この句は心程ことばはよわくたらないけれども。（原文はたらなひ。今訂しておいた。）

奴の男だてにわたくしめらはすかないけれども。

奴に寛闊同じことだ程に墨をひかない。

松葉でもいぶせないで、奴のやさしいことだ。ただし公家奴か。

この奴俳諧の挙句は、

ちっとも霞まないまつりごと

であって、句中に用いられているから、たしかにこれが奴詞だとわかるであろう。そして、右の例でもわかるように、終止形と連体形と、両方に通じて、ないが用いられていることがみられる。

ともかくもないは、今日ではわれわれが、もはやその語に感じなくなっているところの、荒々しい、田舎の、強い語気をもったものであったということが、奴俳諧のおかげで、想像できるわけである。

今あげて来た例の中にもすでに出ていたが、だという語も奴詞であった。その証拠に、この俳諧の発句が、

若竹だ世にはやり歌や清十郎ぶし

であって、これでみると、どうしてもだは、奴詞である。

ほかに句中に用いられただの例は、

田をかへすかへすがへすもういわざだ

ういわざは、うい奴というような讃め詞なのか、憂しという、悲しい、情ないという意味なのか、よくわからぬ。後者ならば文章語である。しかし、だはここでも確かに奴詞である。判のことばになると非常に多い。

打越しの姫に、この君はさしあいだ。如何。二心と見えた。やだやだ。

長の点、こちないことだな。

あんでもたもらないで、少しはおごりだ。

つけはなれない句のしたてだちゃ。

小歌ずきだ。よむ歌出申した。

ないもだも奴詞であることは、以上で明らかだが、もう一つ、この奴俳諧とは離れるけれども、ですという語に触れておきたい。

今日普通に使われるですという語でさえも、もとは標準語ではなかった。そのもとは、でえすで、それが歌舞伎者、伊達者の生活気

分に、いかにも合っておったことばであったとみえて、そういう感覚を喜んで使うような人柄の者が、盛んに使ったことが、歌舞伎正本や浄瑠璃の台本などに多い例でわかる。それはすでに、狂言などにもある。

ですについては、であります、でござりますの系統の語とみる説と、でそろ(候)から出たとみる説とがある。しかし、もしすが候ならば、でえすとはならないはずで、でそろ→でえすの筋の説明がつかない。多分ですはであすから出た語であろう。であすならばでえすが出て来ることは自然だと思う。そしてさらにでえすはでんすともなる。助六の台詞にはこれが多いが、

これはどうしたものでえす

どうでんすな。どうでんすな。

などが盛んに耳につく。そしてこれからやがて、ですが出て来た。だから、丁寧なことばのようではあるけれども。やはり目上に対する語は語でも、奴風の生活気分が盛られていたわけで、だから、ですになって後も、久しく奴詞の気分を持ち続けていて、明治・大正の時代になっても、ですとは折り合えない人も多くいたわけだ。

×

われわれの文章で、明治以後、口語文の要所要所にに使われている肝心なことばの多くが、実は奴詞の系統のものであることは、かなり驚くべき事実である。おそらく一時代前までは、それを承知している人も多かったのだろうが、しかし、他の国の人々にとっては、その奴詞系統の語が、いかにも江戸っ子の決断に富んだ、明確な表現であるというように受け取られたであろうことも想像にかたくない。そういう奴詞が、——奴というある特殊な階級の方言が——江戸の町において行なわれ、相當の年月を経て、その中のいくつかが標準語の仲間入りをして来たわけである。